

「全国へき地教育新聞」教育新聞社
一九六九年三月二六日

能力開発のすすめ

教育革命はへき地から

なぜ複式指導を嘆くか

能力開発工学センター常務理事

矢口 新

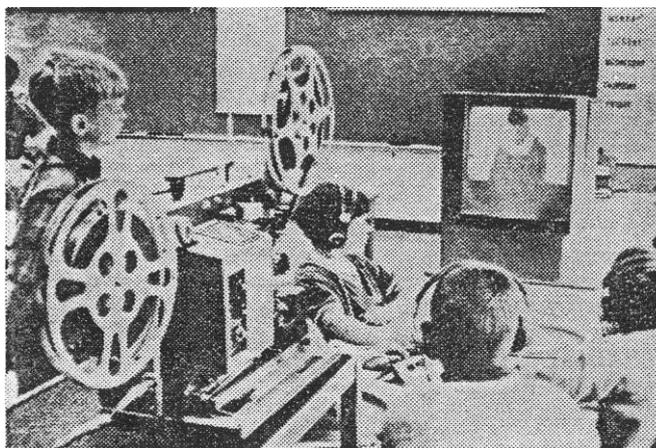
◆人の心のへき地性

へき地教育という言葉が生まれたのは、それが一般の地域の教育に比べて大きなハンディキャップを持っていて、教育の形としては同日に論ぜられないという意識があるからであろう。へき地の教育は都市や農村の教育と比べて断絶があるという意識は極めて強い。それは具体的にへき地の生活状態をみると無理からぬことである。だがそれはわれわれの力によって克服できないものであるか。現代は月まで征服しようという時代で

ある。どうしてへき地を克服できないのか。多分に人の心構えの問題ではないだろうか。へき地を克服するのは人の心のおくれを克服することであるような気がする。へき地に住む人間は、その地域の持つ力でしか教育できないという原則はどこにもないはずだ。現に教科書でも教材・教員でもどんな都会からおくりこんでいる。ラジオでもテレビでもどんな入り込んで行く。もっと積極的に工夫すれば、相当のことができるのである。へき地に金がないなどというのはバカな話である。社会福祉政策というものもある時代なのだから。人の心の構え方をかえなければ何を考えても無駄だということをまず自覚しなければならぬ。

◆複式の方がよい

へき地の教育の大きなハンディキャップの一つは、複式学級であるということは昔から言われて来た。しかしそれとは正反対の思想が最近あらわれている。それは日本のことではないのが残念であるが、多年齢学級のすすめというアメリカのNEA（全米教育協会）民間の文部省といわれている大勢力をもったアメリカの教育者の団体）のパンフレットである。多年齢の学級では、同年齢の学級では



アメリカで始まった無学年制

気の付かなかった教育がある。たとえば年齢の上のものが、下の年齢の者の世話をする。そこには人間が現実の社会で生活するのに必要なさまざまな徳性、知性が養われるという。人間の人格の全体性を考えると多年齢学級の方がどうもはるかに意義がありそうだというのである。これは多くの実験的研究の結果の思想であって、ただの思いつきではない。

こうなるとへき地の複式学級も見直してよいのではないか。同年齢の大きな集団をつ

くって、知識をつめこむのが教育の最善の形態だと考えると、複式学級は大きなハンディキャップだが、視点を変えると、まるでちがったものになる。都会はどのように多年齢学級をつくるかいろいろ苦労しなければならぬのに、へき地は最初からそういう理想的な形になっているのである。上の年齢の者が下の者を世話し、下の者が上の者に従い、お互いに協力し、年齢の差があるところから、他人を客観的にながめて人間というものに深い理解を持つ。下の者に対する話し方を考えるというのは他人に対して、より真剣に神経を使うということをおぼえる。同年齢で大して役に立たない知識をつめこむよりはるかに意味がある集団である。

◆学習活動の多様化

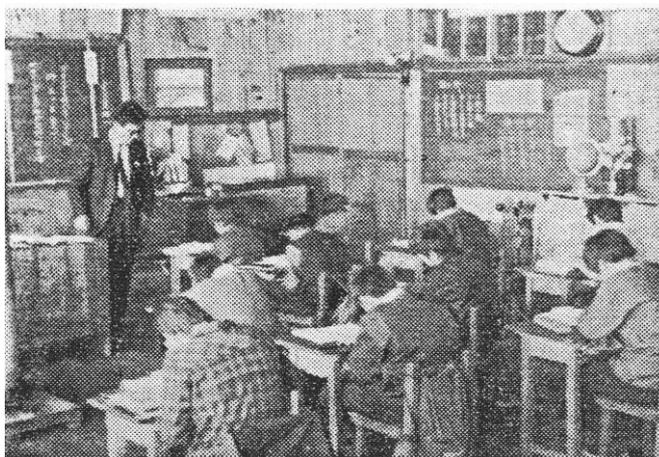
教育という言葉でわれわれにすぐ思い浮かぶのは同一年齢の学級集団で一人の教師が一斉に教育する姿である。その集団の中でもなんでもかんでも片付けようとするのが現代の教育である。しかし考えてみるとこれはおかしい。たとえば音楽で楽器を奏することを考えてみるがよい。それは学級でやるよりもまず第一に一人ひとりの訓練の問題である。体育でも同様である。スポーツのチームプレ

ーにしてもまず一人ひとりがふさわしい能力をもたねばならぬ、いわゆる知識教育といわれるもの、たとえば理科とか社会でも一人ひとりが自分で自然を観察し、実験し、社会のデータを処理する能力をもつ必要がある。そうでなければ、教師の話を聞いてもわからないであろうし、グループでディスカスすることもできない。

というのは、学習というのは何もすべてが個別で行われなければならぬということではない。グループ活動も必要だし、教師の話聞くこともあってよい。しかし一人ひとりが自分の責任で行動することも非常に大切である。これをすべて一人の教師のもつて、すべて学級という集団一括の教育としてやっているというのは誠にチエのない話である。どうしてそういうことが破れないか。情性の中に落ちこんで、頭が働かなくなっているであろう。学級という観念の呪縛から脱出することがまず第一に必要であろう。しかしそういうものから脱出する必要のないのが複式学級である。ところがそれなのに逆に自らすすんで複式学級はだめだと考えるというのはすべて逆な話である。

◆能力を開発するシステムとは

一人ひとりの能力を育てるといえることがお題目のようにいわれ出した。しかし学級のどんぶりの中で一切のことをまかなうというような考え方は、いくらお題目をとんでもだめである。一人ひとりに何をやらせるか、というプログラムを考えなければだめである。シンクロファックスという教育機器が使われているが、そういうものでも使えば多少の助けにはなる。生徒一人ひとりが何かをする場をつくれるからである。そういうものをもっとおし進めればまだまだ多くのことができるはずである。教師がいつも何かをし



個別学習は小規模校が有利

て生徒はそれを聞くというのがよい教育だ
という考え方を切りかえる必要がある。

教師がやるのではなく生徒が観察し、実験
し、整理し、あるいは楽器を使い、という具
合になってはじめて能力がつくのである。そ
うなるためには、教科書だけで教育をしよう
という考えを切りかえなければならぬ。生徒
に何かをやらせる材料をそろえてやり、その
やり方を指示してやり、生徒がやったこと
について、正しいかどうかを判断する資料を
与えてやらなければならぬ。言いかえれば、生
徒にふんだんに教材・教具を与えてやれとい
うことである。その教材、教具もざつとばら
んにいえば、要するに生徒のおもちゃである。
いじくり回して遊べるものである。

このことをむつかしく言うと、「教育の場
は生徒の活動する場である」ということであ
る。そういう場をつくるのが教師の役割であ
る。教師の役割は教室で立ち上がって演説す
ることではない。演説するのはむしろ生徒な
のである。これまでのように教師がしゃべっ
て「わかったか、おぼえておけ」というのは
教育ではないと認識すべきである。これはな
かなかむつかしい転換かも知れないが、そう
しなければ、本当に生徒を育てることはでき
ない。これまでの教師は、昔の手工業の職人

である。もつと科学と技術を使って、新しい
システムの教育を生み出す努力をすべきで
ある。